

公益社団法人Knos(結び目)は、「人と(ヒト以外の)動物の幸せな共生」をテーマに主に社会教育事業を行っています。Knosが日頃お世話になっております素敵な皆さまから、メッセージを頂くシリーズです。

お話: 星 信彦 さん

神戸大学大学院農学研究科教授  
地域連携センター長・獣医師

日本の農業事情をご存知だろうか。日本は世界トップレベルの農業使用大国だ、というところ驚かれるかもしれない。

FAOSTAT(国連食糧農業機関運営の食料・農林水産業関連データベース)2013をみると、日本の耕地面積あたりの農業使用量は、ドイツ、英国、米国の3.5〜5.7倍、北欧諸国の約15倍という農業使用大国の顔がみえます。人口に比べて狭隘で山地と丘陵地が7割を占める国土を持つ日本では、小農家

## 農業と生物多様性

族経営による狭い耕地に肥料や労働を多く投入する「日本型集約農業」により、他のアジア諸国を大きく上回る生産性を達成してきました。

1980年代の農業の主役、有機リン系農薬の後を受けて1990年代からネオニコチノイド系農薬が代表とする浸透性農薬が現在、広く使われています。その背景には、農業従事者の平均年齢が70歳に届こうという未曾有の高齢化があります。もちろん、農業は、

多くの安全性試験によつて安全性を担保されています。しかしながら、生物の方も変化しますし、従来の試験では明らかにできない部分もあります。

WHO, 米科学アカ

デミー、米小児科学会等も注意欠陥多動性障害、うつ病、学習障害などの影響について警鐘を鳴らし、EU(欧州連合)や米国では予防原則に基づきネオニコチノイドの使用を禁止しています。

農業の環境影響も大

きな問題となつていきます。そのような中、我々は佐渡市とともに特別天然記念物トキの野生下繁殖のお手伝いを行いました。トキは、日本産が絶滅し中国産のトキから人工繁殖させ、2008年から佐渡で放鳥を開始。2012

年に佐渡市ではネオニコチノイド系農薬の使用をやめ、手厚い環境整備により、佐渡市でも野生下でトキの繁殖が成功したのは記憶に新しいところです。

年4月に初めて、野生でひなが誕生しましたが、実は放鳥をスタートしてから、ひなが生まれるまでの4年間、卵は産み落とされることはあつても、ふ化しなかつたのです。我々の研究を

ネオニコチノイド系農薬を排除する自治体や団体も増えており、無農薬/有機農業への期待・需要は益々高くなつています。農薬だけでなく、その他の環境化学物質による環境や健康被害を受けないためにも、新しい農業の形を考え、農薬との付き合い方を見つめ直すときが来ているのではないのでしょうか。

